

教育講演 1

理学療法の 50 年—黎明期からの進歩と課題

(公財) 日本障害者リハビリテーション協会 顧問 上田 敏

半世紀前の 1963-66 の 4 年間は、「日本の総合的なリハビリテーション (以下、リハと略) の黎明期」というにふさわしい、記念すべき事件が次々に起こった、めまぐるしく、また輝かしい時期であった。その最初と最後を理学療法関連の事件が飾ったのは偶然ではない。

1963 (昭和 38) 年: この年は日本のリハ医学の生誕の年ともいえるべく、リハ医学の「三位一体」をなす「診療・教育・研究」のそれぞれの面で決定的なことが起こった。それは起こった順に、①教育 (日本初の理学療法士・作業療法士学校が、清瀬の国立療養所東京病院付属リハ学院として開校, 5 月)、②診療 (日本初の大学病院リハ診療部門である東京大学附属病院中央診療部運動療法室〈後のリハ部〉の発足, 7 月) ③研究 (日本リハ医学会の結成, 9 月) であった。

1964 年: 日本障害者リハ協会の設立 (9 月)、パラリンピックの開催 (11 月)。

1965 年: 第 3 回汎太平洋リハ会議の開催 (東京, 4 月)。これは

日本最初のリハ関係国際会議であり、初の総合リハの会議 (医学・教育・職業・社会・行政の各分野が初めて一堂に会した) であった。この年はまた「理学療法士・作業療法士法」が成立した (6 月) 重要な年でもある。

1966 年: この年に清瀬のリハ学院が最初の卒業生を出し、第 1 回の理学療法士・作業療法士国家試験が行われた (2, 3 月)。それによって特例受験者を含め、理学療法士 183 名、作業療法士 20 名が誕生し、間もなく日本理学療法士協会 (7 月)、日本作業療法士協会 (9 月) が結成された。

演者の上田は、ニューヨーク大学留学中の 1964 年を除いて、以上のすべてに直接関与しており、その後もリハ医学の診療・教育・研究、より広い「総合リハ」の建設、またそれらの思想的基盤ともいべき ICF の普及などに努力してきた。その立場から、理学療法を中心にそれぞれの経過を振り返り、その背景を探り、半世紀の進歩を振り返るとともに今後の課題について共に考えたい。

教育講演 2

リハビリテーション医学・医療の今後

藤田保健衛生大学医学部リハビリテーション医学 I 講座 才藤 栄一

新しいといわれてきたリハビリテーション医学も既に始まって 50 年を過ぎた。ただし、長い歴史のある医学の中では、その方法論のユニークさから、未だはっきりしたアイデンティティを宣言しきるには至っていない。

この講演では、医学的と社会的という 2 つの範疇にまたがって存在するリハビリテーションという概念の中で、リハビリテーション医学を専門とする私たち医療者がどのようなスタンスで発展を

とげるべきか考えてみたい。

以下の項目について概観し、将来への展望に触れたい。

- 1) 立ち位置: 病理と QOL の間
- 2) 眺め方: 階層性システム
- 3) 方法論: 活動機能構造連関, 学習, 練習
- 4) 科学性: まず解明すべき領域
- 5) 武器: 専門性を担保する道具